



京大広報

No. 615

2006. 9



京都大学オープンキャンパス2006
一関連記事 本文2218ページ

目次

京都大学における監事活動
監事 原 潔……2216

〈大学の動き〉
「京都大学オープンキャンパス2006」を開催……2218
部局長の交替等……2219
ボート部に総長賞を授与……2219
平成18年度「地域医療等社会的ニーズに対応した
質の高い医療人養成推進プログラム」の採択結果
……2220
平成18年度戦略的創造研究推進事業(CRESTタイプ)
の採択結果……2220
平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ
の採択結果……2220

〈部局の動き〉
高知県にフィールド研「横浪林海実験所」を開設
……2221
寄附講座「臓器機能保存学講座」の新設……2221

〈寸言〉
「学徒出陣壮行之図」余話 須田 寛……2222

〈随想〉
J.D.バナルのこと 名誉教授 廣田 襄……2223

〈洛書〉
変わるものと変わらぬもの 森真理子……2224

〈荣誉〉
西村いくこ理学研究科教授が第59回中日文化賞
を受賞……2225

〈話題〉
再生医科学研究所第1回公開講演会を開催……2225
「第9回高校生のための化学 化学の最前線を
聞く・見る・楽しむ会」を開催……2226
「大学院生のための教育実践講座」を実施……2226

〈訃報〉……2227

〈日誌〉……2230

〈お知らせ〉
湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念展……2230
宇治キャンパス公開2006……2231
第4回農学研究科シンポジウム(No Border Agric.)
……2232
HOPEプロジェクトワークショップ……2232
京都大学のキャンパスメンバーズ制度入会に
ついて……2233

〈公開講座〉
第4回市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る
～物理学最前線～」……2234

〈編集後記〉……2234

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学における監事活動

監事 原 潔

1. 監事監査の基本的な考え方

国立大学の法人化は、大学の自主性と自律性を拡げるために実施された大学改革の一つであり、監事制度も、そのために設けられた国立大学法人における機能の一つです。京都大学監事監査規程において、監事監査は、「本学の業務について適正かつ効率的な運営に資することを目的」とし、また、監事は、「公正不偏な立場で適切に監査を実施することにより、本学の掲げる理念・目的が達成できるよう努めなければならない」と基本的姿勢を定めています。ここで大学の業務とは、教育、研究、医療活動とともに、それを支援する活動など大学運営全般にわたる活動であり、監査は、こうした大学の活動について国民や社会に対して説明責任(アカウンタビリティ)を果たす機能の一つとしての役割を持っています。また、適法性や効率性と共に、本学が掲げる理念や目標・計画からみて業務、会計について総長に対して監査報告の提出や意見を述べる役割があります。

以下では、京都大学における監事活動の概要について取りまとめました。

2. 監査計画

監事監査は、年度ごとに監査計画を4月に策定し、これに基づいて監査を実施しています。監査には、大学における業務全般を対象にした定期監査と特定業務を重点項目として行う臨時監査があります。

定期監査では、年間を通じて主要な会議や行事への出席、書類の閲覧、関係者との面談等によって全般的な業務状況をモニターしています。また、臨時監査は、特定のテーマを定めて実地調査を中心にして実施しています。平成16年度の臨時監査として、学生支援、業務改善、安全衛生管理について実施し、平成17年度には平成16年度監事監査で述べた改善意見への取組状況、入試、遠隔地教育施設、業務改善の進捗、環境保全・安全管理、個人情報保護について実施しました。平成18年度は、学生支援、国際交流、環境マネジメント、施設マネジメント、危機管理、産学連携をテーマにしています。これらの監査項目は、京都大学中期計画に記載されている事項を対象にして、その進捗状況、実施上の課題を知る観点から選定しています。

監査の結果は、毎年6月末に会計監査の結果と共に「監事監査に関する報告書」として総長に報告



し、ホームページ上の監事監査コーナーに掲載すると共に、印刷製本して学内外へ公表しています。また、監事として行った関連調査や監査を通じて感じたことは、その都度、監事ノートとしてHP上で公表しています。監査活動をご理解頂くために、HP上の監事監査コーナーを訪問してください。

3. 監事監査に基づく主な意見

2年間にわたる監事活動を通じて次のような項目について具体的な意見を述べ、併せて改善策を例示的に示しました。

平成16年度

意見1 学生の視点に立った学生支援業務の充実・強化

- (1)学生の要望を取り入れ、大学運営への参加意識を持てる仕組みの実現
- (2)就業体験、生活支援のために学生のキャンパス内雇用を促進
- (3)先行事例をもとに教務事務に関する情報化の全学的促進
- (4)自習室、学寮、課外活動施設の整備等の学生支援のための優先的な投資
- (5)事務組織の再編による学生支援センター等の設置

意見2 本部機能の見直しと部局事務機能の強化

- (1)本部事務を自律的・大学の経営にふさわしい機能に再編し、本部及び部局で実施している定型業務は、事務センター等を設置して集約化、部局事務は、部局運営を支える企画・立案機能の強化
- (2)ベンチマークを導入すると共に、事務職員の計画的、重点的な再配置の実現
- (3)環境安全保健機構等の全学支援機構における事務機能の整備
- (4)業務におけるPDCA(P:Plan, D:Do, C:Check, A:Action)サイクルの組織的実現のために内部監査機能の充実

意見3 実効性のある労働安全衛生管理の実施

- (1)安全管理業務の実施とチェック体制の整備
- (2)安全管理業務の成果評価と表彰制度の導入

意見4 業務改善・組織改革の実行・評価

- (1)事務改革大綱・実施計画の着実な実行
- (2)新設した全学機構等の組織改革の実施状況の推移と評価・見直し

平成17年度

意見1 平成16年度監事監査に基づく主な意見への
継続した対応

平成16年度監事監査で指摘した事項(44項目)について全学的に取組が行われていることは高く評価されますが、実施された事項及び平成18年度から実施予定の項目は、約60%であり、今後も未実施の項目について積極的な取組とフォローアップを継続する必要があります。

特に以下の諸項目は積極的に実施することが望まれます。

- (1) 学生の学内雇用機会の創出, 学生自習室, 学生寮の整備等の学生支援の促進
- (2) 事務組織改革, 業務見直しに伴う, 内部統制, リスク管理体制の強化
- (3) 業務改革の事後評価のために定量的な指標を導入すること
- (4) 職員の業務に対するモチベーションを高めるような人事制度, 人事政策の導入
- (5) 業務費, 一般管理費のみならず, 科学研究費補助金, 外部資金等を含めた大学活動に使用する経費の執行状況の把握と見直し

意見2 アドミッション・ポリシーに応じた入学者
選抜への具体策の実施

- (1) アドミッション・ポリシーの周知方法の改善
- (2) アドミッション・ポリシーに基づく新しい入試枠の検討及び実施

意見3 遠隔地施設における業務上の課題の改善

- (1) 遠隔地施設における活動に関する広報の強化
- (2) 一部遊休施設の有効活用を図るための方策
- (3) 海外拠点の法的位置付け
- (4) 戦略的な海外拠点計画
- (5) フィールド教育の拡充と学生支援策
- (6) フィールド教育へのインセンティブのある予算配分
- (7) フィールド教育に関わる教職員の処遇改善
- (8) 教職員用宿舍の学生利用への開放
- (9) 会議開催数の縮減と業務連絡の効率化

意見4 環境保全及び安全管理業務の実効性向上

- (1) 化学物質管理システム利用状況の検証の継続
- (2) 環境マネージメントへの積極的な取組

意見5 個人情報保護への全学的な理解の促進

- (1) 個人情報保護に対する担当者の理解・認識の促進
- (2) パソコン等における個人情報の取り扱いの運用マニュアルの必要性

平成16年度の監事監査で述べた改善意見の取組状

況については、監査室と連携して2回にわたってフォローアップ調査を実施しました。その結果、全項目について全学的に取組が行われ、改善を提起した事務改革をはじめとして、多くの項目は、改善がなされつつあり、いわゆるPDCAサイクルが循環し始めて、法人として自律的な業務運営が行われつつあることを検証することができました。平成17年度の監査に基づく改善意見への取組状況についても同様に今年度の監査の中でもフォローアップ調査を予定しています。

改善のためには、財源や人材の確保など抜本的な対策を必要とする課題もあるので、実現までにある程度の時間を要することは理解できますが、組織的、計画的に早急な取組が求められます。

4. 監事の役割

法人化後の大学経営は、中期計画を達成するために年度計画に基づいて実施されています。そのために組織的には総長の指揮のもとに、各理事が担当業務を総括する体制ですが、中期計画は、教育、研究、医療の現場(フィールド)における業務の実施、積み上げによって達成されるのであり、そのため業務実施上の課題の多くはフィールドにおいて顕在化すると考えられます。このため監事活動を通じて、できるだけフィールドにおける業務状況を横断的に、正確に把握するように努めています。その意味から監事活動は、大学業務のフィールドスタディであり、監事監査に関する報告書は、大学活動の健康診断書のようなものであると考えています。

監事監査は、大学経営の視点から行われる内部監査及び会計監査人による会計監査との連携を図りつつ、大学業務全般を独立した視点から実施する監査です。京都大学で行われる業務は、内容的にも地理的にも多岐・広範囲であり、監査を実施できるのは、その一部であることは言うまでもありません。現在は、初年度の試行的な監査から監査成果・経験を積み上げながら監査機能そのものにPDCAサイクルを導入して、監査の質を高めている途上にあります。

いずれの業務も改革・改善をすればするほど新たな課題やリスクが生じて、また新たな改革・改善や見直しが必要になるのが通例であり、今後もその状況・推移を監事の立場から見守る必要があると考えています。

こうした監事監査を通じて京都大学における業務の透明性を確保し、社会への説明責任の一端を果たしつつ、監事監査に基づく意見が、京都大学の理念・目標の実現に役立つことを期待しています。

大学の動き

「京都大学オープンキャンパス2006」を開催

京都大学オープンキャンパス2006が、「ひらり、夢馳せる知の旅へ。」をテーマに8月10日(木)・11日(金)の両日、全国各地から高校生、保護者、引率者等を含め2日間で約7,200人が参加し、開催された。

今年で5回目を迎えるオープンキャンパスは、初日を総合人間学部・文学部・教育学部・法学部および経済学部の5学部、2日目は理学部・医学部・薬学部・工学部および農学部の5学部に分けて実施した。

オープンセレモニーは百周年記念ホールを会場として、両日も500名の定員で行われた。鈴木基史

オープンキャンパス委員会委員長(法学研究科教授)の司会進行により、はじめに東山紘久理事・副学長から「ようこそ、オープンキャンパスへ」と歓迎



法学部の須田 守さん

の挨拶があり、続いて尾池和夫総長が「京都大学をめざす皆さんへ」と題して、京都大学の歩みと現状そして未来について語られた。

その後、京都大学応援団による力強い演舞と受験合格への熱いエールが送られ、参加者から盛大な拍手が沸き起こった。



農学研究科の福田恭子さん

最後に在学生からの熱いメッセージと題して、初日は法学部1回生の須田守さんが、2日目は大学院農学研究科修士課程1

回生の福田恭子さんが、それぞれ自らの受験や就学体験を熱く語り、オープンセレモニーは閉会した。

百周年時計台記念館国際交流ホールでは、入試・学生生活・就職・留学およびキャンパスライフ等の相談コーナーが開設され、参加者や保護者からの相談や質問に担当職員が応えた。また、同ホールでは、参加者と在学生が受験勉強や学生生活に関することなど様々なことを、親しく語り合う交流コーナーが併設され、両日も大勢の参加者で賑わい、和やかな交流風景が見られた。



小田伸午教授の講演

この他、百周年記念ホールでは、午後に「京大人気教員からのエール」と題して、小田伸午高等教育研究開発推進センター教授と青谷正妥国際交流センター助教授による講演会が開催され、両教員の興味深い研究内容の紹介やユーモア溢れる語りに、満員の会場は終始参加者の熱気と笑い声に包まれていた。同ホールでは、引き続き「京大生協から見た学生生活・京大キャンパス紹介」と題した説明会が催され、参加者や保護者が熱心に説明に聞き入っていた。

附属図書館・総合博物館・百周年時計台記念館展示ホールおよび学術情報メディアセンター北館では、本学が誇る蔵書群・貴重な展示物や普段目にするのでできないスーパーコンピュータなどを、興味津津の表情で熱心に見学する多くの参加者で賑わった。

また、在学生のボランティアが大学構内を案内す



教育学部の学部紹介

るキャンパスツアーも好評で、猛暑の中、在学生の説明に汗を拭きながら耳を傾ける光景が、構内のあちらこちらで見られた。

学部説明会では、AとBの2回の時間帯を組み、学部長の歓迎の挨拶や模擬講義、施設見学、研究室訪問、相談コーナー等、それぞれの学部企画が実施された。各学部会場では、参加者を歓迎する教職員や在学生の熱意が伝わったかのように、多くの参加

者が熱心に真剣な表情で説明会に参加し、各学部への関心の高さがうかがえた。

学部説明会終了後も、参加者はそれぞれ大学構内を自由に散策し、京大ショップで京大グッズを購入したり、時計台記念館前楠周辺やカフェレストラン「カンフォーラ」、レストラン「ラ・トゥール」で休息するなど、京都大学は一日中賑わった。

(学生部)

部局長の交替等 (新任)

次世代開拓研究ユニット長

時任ときとうのりひろ宣博化学研究所教授(物質創製化学研究系(有機元素化学))が、7月31日付けで初代次世代開拓研究ユニット長に任命された。任期は平成20年7月30日まで。



ボート部に総長賞を授与

6月11日、埼玉県戸田市の戸田漕艇場で開催された第84回全日本選手権で、ボート部舵手つきペアクルーが見事優勝を収めたことを受け、7月31日(月)に総長賞の表彰式が、新聞各社の集まるなか執り行われた。受賞したのは、漕ぎ手：夜久智広さん(工学部4年)、新木邦生さん(工学部3年)、コックス：竹田浩二さん(法学部4年)の3名。

尾池和夫総長から代表で表彰を受けた副将の夜久さんは「京都大学の名誉をあげてくれたと総長におっしゃっていただいととても名誉です。次回の全日本大学選手権でも優勝を狙います。」と、意気込みを力強く述べた。



尾池総長、東山理事・副学長と受賞者

平成18年度「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」の採択結果

「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」は、文部科学省が社会から求められる質の高い医療人の養成推進を目的として、社会的ニーズに対応したテーマを設定し、国公私立大学から申請された取り組みの中から、特に優れた

取り組みに対して財政支援を行うプログラムである。

平成18年度は「分野別偏在に対応した医師の養成」、「臨床能力向上に向けた薬剤師の養成」の2つのテーマで公募が行われ、22件の取り組みを採択、うち、本学からは1件が採択された。

公募テーマ	取組の名称	取組代表者
臨床能力向上に向けた薬剤師の養成	先端医療の育・創薬を先導する薬剤師育成	薬学研究科 佐治 英郎 教授

平成18年度 戦略的創造研究推進事業(CRESTタイプ)の採択結果

科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業(CRESTタイプ)は、社会・経済の変革につながるイノベーションを誘起するシステムの一環として、戦略的重点化した分野における基礎研究を推進し、今後の科学技術の発展や新産業の創出につな

る、革新的な新技術を創出することを目的としている。

平成18年度第1期募集研究領域における新規採択研究課題として43件が決定され、本学からは3件が採択された。

研究領域	研究課題名	研究者氏名
マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション	複雑分子系の複合分子理論シミュレーション	福井謙一記念研究センター 諸熊 奎治 リサーチリーダー
	ソフトマターの多階層/相互接続シミュレーション	工学研究科 山本 量一 助教授
代謝調節機構解析に基づく細胞機能制御基盤技術	代謝応答を統御する新たな分子機構の研究	医学研究科 鍋島 陽一 教授

平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択結果

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、文部科学省が、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な教育の取り組み

を重点的に支援するもので、公募によって決定される。文部科学省は今年度分として、35大学46件を採択、うち、本学からは人社系1件、理工農系2件の計3件が採択された。

分野(系)	教育プログラムの名称	主たる研究科専攻名・取組実施担当者(責任者)
人社系	臨地教育研究による実践的地域研究者の養成	アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻 重田 眞義 助教授
理工農系	シミュレーション科学を支える高度人材育成	情報学研究科数理工学専攻 中村 佳正 教授
	生命科学キャリアディベロップメント	生命科学研究科高次生命科学専攻 石川 冬木 教授

部局の動き

高知県にフィールド研「横浪林海実験所」を開設

黒潮を北上する鯨が土佐湾のランドマークとする横浪半島(高知県須崎市)の海辺に、フィールド科学教育研究センター「横浪林海実験所」が開設された。通常海辺の実験所は「臨海」と表現されるが、この実験所は「林海」というユニークなものである。それはほとんど手つかずの照葉樹林が魚付保安林として機能していることや、半島の先端近くに流入する仁淀川をモデルに森・川・海のつながりに関する教育研究拠点にしたいとの願いからのネーミングである。高知県が取り壊しを決めていた「子供の森」の施設を、アウトドアライターの天野礼子氏が仲介役を務め、高知県水産試験場と高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科とともに共同利用することとなった。2月23日(木)に須崎市において上記三者と地元池ノ浦漁業協同組合の間で協定書の調印が行われ、4月27日(木)には開所式が行われた。9月末にはポケット・セミナー「高知・仁淀川流域の自然」の会場とな



開所式での看板上掲式

る予定である。数名の宿泊も可能であり、30~40人規模の定期的なセミナーや環境教育にも利用される。前面水域には見事なサンゴ礁が広がり、今後温暖化に伴う環境や生物の長期的変化のモニタリング拠点としても重要な役割を果たすと期待される。

(フィールド科学教育研究センター)

寄附講座「臓器機能保存学講座」の新設

8月1日、大学院医学研究科に寄附講座「臓器機能保存学講座」が設置された。今回設置された「臓器機能保存学講座」の概要は以下のとおり。

- | | |
|---|--|
| <p>1. 部局名 大学院医学研究科</p> <p>2. 名称 臓器機能保存学講座
(Department of Organ Preservation Technology)</p> <p>3. 寄附者 株式会社大塚製薬工場</p> <p>4. 寄附金額 総額2億2千5百万円</p> <p>5. 設置期間 平成18年8月1日
~平成23年7月31日</p> <p>6. 担当教員 寄附講座助教授 板東 徹
寄附講座講師 中村 隆之
寄附講座助手 藤永 卓司</p> <p>7. 研究目的 体外環境下に置かれた臓器、組織、細胞の機能低下ないし機能喪失の現象を科学的に解析し、その機序を明らかにする。また、自然界に存在する細胞機能を保持する現象の分析を通じて、臓器、組織、細胞機能を保</p> | <p>存・維持する機序を研究する。</p> <p>8. 研究内容 臓器機能保存学の確立と発展、移植医療、再生医学の臨床に役立つ知識を開発する。</p> <p>9. 研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・細胞レベルにおける機能低下・喪失機序に関する基礎研究 ・組織、臓器レベルにおける機能低下・喪失機序に関する基礎研究 ・Ex vivo モデル、移植モデルなどを用いた体外環境下における臓器、組織、細胞機能保存に関する基礎研究 ・自然界に存在する環境耐性機構に関する研究と応用 ・臓器、組織、細胞機能保存に関する臨床研究 |
|---|--|

寸言

「学徒出陣壮行之図」余話

須田 寛

今も京都大学百周年時計台記念館迎賓室に掲げられている標記の油絵は、昭和18年に制作されたもので、作者は私の父須田国太郎です。18年秋、太平洋戦争の戦局悪化により、これまでの大学生に対する徴兵猶予の特別措置が廃止



され、臨時徴兵検査を経て多くの学生が学窓から戦地に赴くことになりました。その壮行式が京都大学農学部グラウンドで行われ、出陣学生が軍装で分列行進を行って羽田 亨総長の視閲を受けました。京大出身の画家であった父が、大学当局の依頼を受けて会場に赴き、その模様を油絵に残したのがこの作品です。この絵が有名になったのは敗戦後占領軍に接收されたり、過激派の学生集団に持ち去られたりしてその数奇な運命が話題を呼んだことにあります。私の父は当時の多くの画家がした(させられた)ように、戦時中、戦争画を描くことをたびたび求められました。しかし父は、戦争画は写真や戦地の風景を見るだけで描かざるを得ないが、そのように自分が戦争場面を実視で描けない絵を描く力はないといって頑なに断ってきました。従って、この絵は父の描いた唯一の戦争に関わる絵でありました。実写できたこと、母校からの依頼、このふたつが執筆の動機だったと思います。

父はこの絵の制作動機と心境について何度も家族に話をしました。それは戦争画を断ってきたことについての弁明のようにも聞こえましたが、この絵をみていただく方々の参考になろうかと思い、あえてご紹介しておきたいと思います。

この絵は、壮行式当日会場で描いた数十枚のスケッチが下絵になっています。これを部屋の画架のまわりに貼り出し、それを見ながら筆を進めました。父の制作意図は「群像」という洋画の技法をこの絵で表現したかったのだそうです。その「群像」を構成する分列行進参加の学生の姿を遠景におきながら正確に描き出すことに苦勞したといひます。今ひとつの父の気持ちは、この分列行進の雰囲気や適確に伝えるために、即ち物言わぬ絵に如何に迫力を持たせか



迎賓室に掲げられている「学徒出陣壮行之図」



「学徒出陣壮行之図」の下絵（部分）

つ「語らせる」かということであったそうです。画面中央に大きくブラスバンドの楽器を描いていること、学生が行進が伝わってくるような動的な描写に心がけたそうです。また父は当時、京大美術部で絵画の指導をしておりましたが、その部員の何人かの顔がこの中にみえ、その人たちの武運を(何とか生還してほしいと)祈る気持ちも表現したかったと話しておりました。これは私の解釈ですが、楽器を大きく前面に出したことは、先ほどの迫力を表現すると共に音楽という芸術を感じさせることで何とか戦争画色を薄めたい、また、多くの学生の生還を望みたいという平和への願いがこめられていたような気がしてなりません。

父は決して反戦主義者ではありませんでした。戦時中は町内会長を務めており「国策への協力」を多くの人に呼びかけ、自分も率先して防空訓練等を行い、また出征軍人の家族の援護などに当たっておりました。そのような父の描いたこの絵を今思い返してみると、もはや絶望的となっていた当時の戦局のなかで、何かわずかな希望をこの学生たちの若さあふれる迫力ある行進に託したかったのではないかと思います。

この画はそのような「何かを考えさせる戦争画」だと思えてなりません。

(すだ ひろし J R 東海相談役, 昭和29年法学部卒)

随想

J. D. バナールのこと

名誉教授 廣田 襄

J. D. バナールは、「歴史における科学」の著者として、私の年代の多くの人にはなじみ深いであろう。彼は1930年代にX線結晶学を生体高分子の構造解析に応用した先駆者であり、彼のその研究は後の分子生物学の誕生に連なる。また、水の構造や生命の起源に関しても先駆的な業績がある。バナールは専門の科学はもとより、全ての事に百科事典的な知識を有し、Sage(賢人)というニックネームで呼ばれていた。早くから科学の社会的な役割について考察し、その活動は科学の領域をはるかに超え、第二次大戦中のイギリスおよび連合軍の作戦計画への関与、戦後の平和運動、核兵器廃絶運動でも大きな役割を果たした。まことに万能の天才ともいえる類まれな知性の持ち主であったが、熱烈な共産主義者で、共産主義とソ連の実情が明らかになっても、なお共産主義を信じ続けたという不可解な面もあった。最近、Andrew Brownによる伝記「J. D. Bernal The Sage of Science」(Oxford Univ. Press. 2005)を読み、新しい学問分野を生み出す背景、科学の社会的役割、科学の組織化と個人の独創性、人間の複雑さなどについて色々な感慨を持ったので、その一端をここに綴る。

バナールはケンブリッジ大学の結晶学の講師の職についてすぐの1930年代の初めに、ブラッグ父子によって開拓されたX線結晶学を生体関連分子や生体高分子の研究に応用することを始めた。30才そこそこの若いバナールが物理、化学、生物にまたがる学際的な研究を、ケンブリッジの開拓的な学問的雰囲気の中で自由に行っていたことは極めて印象深く、講座制のヒエラルキーの強かった日本とは状況は非常に異なっていたように思われる。このケンブリッジの状況が、新しい学問を生み出す背景として重要な役割を果たしたと思う。バナールはたんぱく質の



構造解析が、生命現象解明への鍵を握ると信じて研究を続けたが、当時のX線解析の技術ではたんぱく質の構造はあまりにも複雑で、すぐに成果のあがるような研究ではなかった。彼は多くのアイデアを惜しみなく周囲に与え、周囲の研究者に刺激を与え続けた。20年後にはケンブリッジでワトソン・クリックのDNAの構造解明を始めとする分子生物学の輝かしい成果が生まれ、数々のノーベル賞受賞に輝く業績が彼の周辺で続出したことを考えると、バナールの果たした先駆的な役割は大きい。すぐに成果を求めたがる現在の日本においては、ケンブリッジで分子生物学が誕生した経緯には参考になることが多いと思う。バナール自身はノーベル賞を受賞していないが、それは彼の興味があまりにも広くて一つのこと集中できなかつたためであろう。

1939年にバナールは「科学の社会的機能」を出版して科学の現状を分析し、人類のために貢献できる科学として組織化することの必要性を論じ、ビッグサイエンスの到来を予見した。科学の組織化には賛否両論があり、意識的な組織化では真に新しい独創的な科学を生み出すことはできないというM. ポラニーらによる強い反論もあった。今日では科学の組織化ははるかに進み、ビッグサイエンスは当たり前なものとなったが、科学の組織化と個人の自由と独創性をいかにして両立させるかは重要な問題として残っている。そして、バナールが目指した人類のための科学をいかに実現するかはさらに困難な問題である。科学・技術の重要な役割は一般に認識されて多額の資金が投入されているが、その分配や運用は必ずしもうまくいっておらず、科学におけるミスコンダクトも頻発している。科学や科学行政に携わる人は、科学・技術に対するしっかりした哲学と現状認識を持つことがますます重要であると思われる。

Brownによる伝記は、この天才的で複雑な人物の波乱に満ちた生涯を、時代背景を織り交ぜて生き生きと描いている。500ページを超える大著であるが、邦訳の出版が望まれる。

(ひろた のぼる 元理学研究科教授 平成12年退官、専門は物理化学)

洛書

変わるものと変わらぬもの

森 真理子

以前「洛書」に一文を寄せたことがある。広報担当者の話では、それは10年前のことで「留学生センターの行方」と題するものだったらしい。その時から10年を経て留学生センターはどのように変わったか。



まず最も大きな変化は「留学生センター」という呼称がなくなったことであろう。といっても、平成17年に「国際交流センター」と改称されて今も健在であるから、実質がなくなったわけではない。しかし、「国際交流センター」の仕事は、それ以前のセンターの仕事とは大きく変わった。この間にセンターではいくつかの学生教育交流プログラムが生まれた。留学生数も、途中横ばい状態の時期はあったが、現在も右肩上がりに増加している。学生交流が盛んになるにつれて、留学生の質も大きく変わってきた。何より大学そのものが大きな変貌を遂げた10年であった。

先に留学生の質が変わったと書いたが、これは世界的な傾向だといわれる。学生は在学中に留学することが義務づけられ、単位も加算されるという教育システムが次第に制度化されつつあるため、留学というものが特別なことではなく、単位取得の一選択肢になってきているからである。そのため留学生はエリートであるという一昔前の留学生観は塗り替えられることになったわけである。

では、この10年間に変わらなかったものは何であろう。留学生の質の変化はあるものの、学生一人一人が外国で学ぶことへの大きな興味、新しいものへの探求心は、時代を経ても変わらない最大のものではないかと考える。私自身は非常勤講師として京大で留学生を教え始めてからセンター勤務時代を加えると都合25年留学生と付き合っていることになるが、学生の学ぶ意欲、努めて偏見を排して物事を客

観的に見る態度、多様な価値観のぶつかりあいの中から未熟ではあっても一人一人なんらかの解決の方法を模索する姿にいつも驚かされる。

話は全く変わるが、この夏2年ぶりに帰省し、小学校の同級生に星を見に来ないかと誘われて、一晚九州の中津江村というところに泊まった。この場所を訪れるのも実は10数年ぶりのことである。10数年前はバスで訪れた。山道を延々行くのだが、どこまで行っても客は私一人で、誰も乗って来ない。あまりのことに、一枚目の写真は誰もいないバスの中を記念に写したのだが、親切な写真屋はそれを試し撮りの一枚だと考えて現像してくれなかった。

この村を10数年ぶりに訪れて改めて確認し、考えさせられたことがある。新しく舗装された道路、新築された友人の家など大きく変わったものはあるけれど、それとは対照的に全く変わらない九州の山並みの美しさ、澄んだ空気、満天の星がそこにあった。友人の話では、この村も4月の市町村合併で近くの市に組み込まれたため、職員は市役所からの出向ということになって、なかなか居ついてくれない。このままでは村の美しい自然や産物を日本中の人になかなか知ってもらえないので、いろいろ手探りで自分たちのできることを見つけ、外に向けて発信することを計画しているということである。彼女はその計画を実に楽しそうに語った。雄大で美しい山並みは確かにそれだけで美しく人をひきつける魅力があるが、実はこの自然を維持するためには、そこに住む人々のどんな時にも前を向いて新しいことに挑戦する、不断の努力があったのである。

変わっていく時代をしっかりと見据え、その中で自分にできることは何かを決めてあきらめずに考え続けること、それが変わらない優れたものを維持するための最も有効な方法ではないか、センターの将来を想う時、私はそのような感慨を抱くのである。

(もり まりこ 国際交流センター教授、専門は日本近世文学)

荣誉

西村いくこ 理学研究科教授が第59回中日文化賞を受賞

中日文化賞は、昭和22年に中日新聞社が日本国憲法の施行を記念して制定した賞で、学術・芸術の各分野で文化の向上に寄与した方に授与されます。5月3日(水)(憲法記念日)に、第59回中日文化賞が中日新聞社より発表され、西村いくこ理学研究科教授の受賞が決まりました。贈呈式は、5月30日(火)に名古屋市中区の中日パレスにおいて行われました。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介いたします。

西村いくこ教授は、昭和49年大阪大学理学部生物学科を卒業、同年に大阪大学大学院理学研究科に進学し、同54年に大阪大学理学博士の学位を授与された。その後、大阪大学湯川奨学生、同理学部教務職員、名古屋大学農学部研究生、神戸大学理学部研究生、フランス国立科学研究所客員研究員を経て、平成3年現自然科学研究機構基礎生物学研究所助手、同9年同研究所助教授、



同11年京都大学大学院理学研究科教授となり、現在に至っている。

西村教授は、高等植物の細胞小器官(オルガネラ)に注目しながら、様々な生命現象の機構を分子レベルで明らかにされてきた。特に、種子タンパク質の細胞内輸送系や植物の生体防御に関わる新しいオルガネラの発見や、植物の細胞死の制御系に関わる因子の発見などにより、植物科学の発展に大きく貢献されてきた。これらのオリジナリティ溢れる業績は国際的に高い評価を受けている。

(大学院理学研究科)

話題

再生医科学研究所 第1回公開講演会を開催

再生医科学研究所は7月29日(土)に時計台記念館百周年記念ホールで高校生・一般の人を対象にした公開講演会を開催した。

ヒト胚性幹細胞(ES細胞)の研究にはヒト受精卵を用いなければならない等、再生医科学は多くの人達の理解が無くては研究を進めることが出来ない。また、若い人達に再生医科学に興味を持ってもらい、将来の進路の候補に考えてもらうことも重要である。これらのことを考え、一般の人や高校生を対象に再生医科学研究所で行っている研究内容を分かりやすく説明をする公開講演会をシリーズで開催することを計画している。今回はその1回目である。

再生医科学研究所長中辻憲夫教授による「ES細胞が持つ不思議な能力と難病治療への期待—なぜ万能細胞と呼ばれるのか—」では、理解を深めるためにES細胞の基本的な事柄から難病治療への可能性の紹介、さらに、倫理的側面から考えなければならない問題点について解説した。また、岩田博夫教授による「医療と工学」では、バイオ人工臓臓を例に挙げて医療に必要な工学分野の研究の現状を紹介した。



講演会の様子

講演の後の質疑応答では、聴講者からの質問も活発で、予定時刻を45分超えて終了した。

来場者は280名を超え、制服姿の高校生の参加が目立った。来場者のアンケートでは、4分の3の方からの回答を得、次回への参加希望が多く、好評であった。

(再生医科学研究所)

「第9回高校生のための化学 化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会」を開催

宇治キャンパスにある化学研究所では、7月29日(土)に、中高生を対象に化学の最前線を聞いて、見て、楽しむ見学会を開催した。

化学に対する興味と理解を深める場として開催する本会も今年度は9回目で、参加者は約130名、9割以上が高校生と中学生であった。また、府県別には京都、大阪、奈良、滋賀、兵庫など近隣ばかりか岐阜、北海道などからの参加もあった。

参加者は、11の見学のサイトの中から、午前・午後それぞれ1ヶ所ずつを訪問し、普段はほとんど目にする事のない物質や実験装置を使っての実験を通じて、化学の楽しさを体感した。参加者からは「教科書でしか見たことのないものを実際に見て、実験を通じて教科書以上のことを知ることができた」



レーザー実験を体験

「学校ではやらない実験を見たり、やったりできてよかった」など、評判は上々であった。

(化学研究所)

「大学院生のための教育実践講座」を実施

高等教育研究開発推進センターは、学生部の協力を得て、第2回「大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—」を8月7日(月)に時計台記念館において実施した。

この講座は、昨年より、全国で初めての試みとして、大学教員をめざす本学の大学院生を対象に、教員への自覚的自己形成のきっかけを与えることを意図して計画したものである。

当日は、尾池和夫総長の挨拶から始まり、ミニ講義、討論、ポデワークなど8つのセッションが行われ、終始積極的に参加した18名の院生に対して、研修終了後に、東山紘久理事・副学長により、総長名による修了証が授与された。

参加した院生の評価も高く、来年度もさらに充実したプログラム、より多くの参加者を期して、高等教育研究開発推進センターを中心に準備を積み重ねていく予定である。

※高等教育研究開発推進センターホームページ
http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/gp/gp_inseikoza.html

(高等教育研究開発推進センター)



松下佳代高等教育研究開発推進センター教授によるミニ講義1「大学の授業1」



熱心に受講する参加者

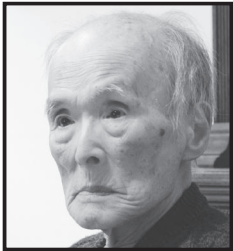
訃報

このたび、^{かわもと}河本 ^{みのる}實名誉教授、^{まつだいら}松平 ^{ちあき}千秋名誉教授、^{さえき}佐伯 ^{とみ}富名誉教授、^{ひらおか}平岡 ^{まさかつ}正勝名誉教授、^{いなば}稲葉 ^{ひろお}宏雄名誉教授、^{おおし}大橋 ^{みつ}ミツ医療技術短期大学部名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

河本 實 名誉教授



河本 實先生は、4月18日逝去された。享年93。

先生は、昭和11年京都帝国大学工学部機械工学科を卒業、同学部講師、助教授を経て、同22年工学部教授に任ぜられ、機械工学第二講座、材料力学講座を担当された。昭和51年停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後引続いて昭和60年まで摂南大学教授、客員教授を務められた。

先生は、材料力学、特に材料の疲労強度に関して多大の優れた研究業績を残された。その成果は国の内外を問わず数多く引用されており、斯学の発展へ

の寄与が極めて大きいとともに、多くの優れた後継者を育成された。研究分野は、組合せ応力による疲労、疲労による変形、疲労に及ぼす繰返し速度や運転休止、はめ合い部、切欠き鋭さなどの諸因子の影響、実働荷重による疲労など多岐にわたっている。主な著書に『材料力学』、『材料試験』などがある。

先生は、日本材料試験協会(現日本材料学会)の設立を發議し、昭和29年の創立および学会としての基盤構築に尽力されるとともに、同学会および日本機械学会において要職を歴任された。

これらの多くの業績によって、昭和60年秋に勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院工学研究科)

松平 千秋 名誉教授



松平千秋先生は、6月21日逝去された。享年90。

先生は、昭和13年京都帝国大学文学部文学科を卒業、同大学大学院においてギリシア・ラテン語学・文学を修められた後、文学部副手、講師を経て22年4月助教授、33年8月教授に就任、54年4月停年による退官に伴い名誉教授とされた。この間、37年2月文学博士、38年2月から10月までマインツ大学客員教授、45年3月から47年1月まで評議員、46年3月から47年1月まで文学部長を務め、大学紛争末期の難局に当たられた。京都大学退官後は光華女子大学教授、京都産業大学教授を歴任し、61年3月、退職された。

京都大学文学部に我が国最初の西洋古典専門講座

が設置されたが、その初代教授として先生の斯学に果たされた功績は計り知れないものがある。『ギリシア語文法』『ギリシア語入門』『新ラテン文法』(いずれも共著)は標準的な教科書として多くの古典学徒を育ててきた。先生はまた日本西洋古典学会の創設に与り、昭和48年から13年の永きにわたって学会委員長を務めるなど、日本における西洋古典学研究を主導して来られたが、その功により昭和48年、ギリシア政府よりフェニックス十字勲章を受章された。ヘロドトス『歴史』、ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』の翻訳は学者の仕事の域を越える文業として絶賛され、クセノポン『アナバシス』翻訳により読売文学賞を受賞された。昭和63年勲二等瑞宝章、平成8年京都府文化賞。

(大学院文学研究科)

佐伯 富 名誉教授



佐伯 富先生は、7月5日逝去された。享年95。

先生は、昭和10年京都帝国大学文学部史学科を卒業、同大学大学院において東洋史学を専攻の後、東方文化研究所助手、京都帝国大学人文科学研究所助手を経て、同17年山口高等商業学校教授に任ぜられ、同24年5月京都大学文学部助教授、同32年3月教授に就任、東洋史学第3講座を担当された。昭和49年、停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その間、昭和31年文学博士の学位を授与され、同43年4月から45年3月まで京都大学人文科学研究所教授を兼務し、また同45年度の史学研究会理事長を務められたほか、長年にわたり東洋史研究会の発展に尽力された。さらに、

昭和54年4月から56年3月まで、大谷大学文学部教授を務められた。

先生のご専門は中国史、とりわけ宋代より清代にいたる中国近世史であり、政治・社会・経済の多方面にわたり数多くの業績を挙げ、堅実精緻な学風を築き上げた。とりわけ、宋代の茶の専売制度、清代の塩の専売制度についての重厚な研究は内外に名高い。またフランス、西ドイツ、英国、米国での調査活動のほか、台湾大学に客員教授として招聘されるなど、海外の東洋学者との学術交流にも努められた。

こうした功績に対し、昭和58年4月勲三等旭日中綬章を、平成元年「中国塩政史の研究」により日本学士院賞・恩賜賞を授与された。

(大学院文学研究科)

平岡 正勝 名誉教授



平岡正勝先生は、8月6日逝去された。享年75。

先生は、昭和28年京都大学工学部化学機械学科を卒業、同大学工学部講師、助教授を経て同44年教授に就任、産業衛生工学講座を担当されたのち同45年衛生設備学講座を担当され、平成3年大学院工学研究科環境地球工学専攻発足と同時に環境情報工学講座を担当、衛生設備学講座を兼任された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和55年から平成6年まで環境保全センター協議員、昭和60年から平成元年まで環境微量汚染制御実験施設長を務めら

れ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、平成6年4月から立命館大学理工学部客員教授、同8年4月から同大学エコ・テクノロジー研究センター長を務められた。

先生は環境システムの設計と制御・管理に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、環境移動現象論、環境地球工学の基礎を築かれた。

また、廃棄物学会、環境システム計測制御学会の創立に尽力されるとともに会長を務められた。これら一連の活動により、平成10年6月環境庁長官表彰(環境保全功労者)を受けられた。

(大学院工学研究科)

稲葉 宏雄 名誉教授



稲葉宏雄先生は、8月21日逝去された。享年75。

先生は、昭和29年京都大学教育学部を卒業、同34年3月まで同大学大学院に在籍の後、京都女子大学講師、助教授を務め、同47年4月京都大学教育学部助教授を経て、同54年3月同学部教授に任ぜられた。平成7年京都大学教授を停年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、平成7年から同11年まで近畿大学生物理工学部教授、同12年から同15年まで龍谷大学文学部教授として、引き続き教育研究活動を続けられた。

先生は、研究面においては、教育課程における「知育」や「学力」の重要性を一貫して主張され、デューイの「探究」の論理、ブルナーの「構造」の概念とそれに基づく「学問中心教育課程」の展開を考究され

た。また、学力保障の観点から、「到達度評価」の理論と実践の分析に心血を注がれ、教育学・教育方法学から「教育評価」の問題に迫るという方法論を確立された。さらには、近代日本の教育学の生成と発展を厳密なテキスト・クリティークによって跡付け、とりわけ教育学における「京都学派」の確かな教育学的思惟の深化を解明された。

この間、先生は昭和63年4月から2年間教育学部長、また4期5年にわたり評議員を務められるなど、学部の充実発展のみならず、京都大学全体の発展にも尽力された。また、学外においても、日本教育学会理事、日本教育方法学会理事、日本デューイ学会理事、関西教育学会会長、教育目標・評価学会代表として、教育界で解決が迫られている諸問題に精力的に取り組まれた。

(大学院教育学研究科)

大橋 ミツ 医療技術短期大学部名誉教授



大橋ミツ先生は、4月29日逝去された。享年79。

先生は、昭和25年立命館大学文学部哲学科を卒業、大阪府立天王寺高等学校教諭を経て、昭和29年から同44年まで大阪市立大学家政学部助手として心理学の研究及び学生の教育に当たられた。その後は、立命館大学および京都大学医学部附属看護学校の非常勤講師を務められ、昭和50年4月京都大学医療技術短期大学部設置と同時に同短期大学部教養科教授に就任され、心理学の授業を担当された。平成2年停年により退官され、京都大学医療技術短期大学部名誉教授の称号を受けられた。

先生は、心理学、発達心理学及び相談心理学に関する多くの研究論文を発表され、記憶における色彩と形態の研究、聴覚的記憶における刺激材の特性等の研究において、記憶と物の形態、色彩、音の間に成り立つ関係を実験的に明らかにされた。また、心身発達に及ぼす幼稚園教育についての研究、特に視知覚の発達心理学的研究においては、長期に実験的研究を重ねて貴重な成果を上げられた。さらに、数概念の発達に関する研究では、幼児の数概念が如何に形成されるかを明らかにされるなど、心理学の分野の発展に寄与された。

(医療技術短期大学部)

日誌 2006.6.1 ~ 7.31

- | | | | |
|------|--|---------------------------------------|---|
| 6月2日 | Dr. Torsten N. Wiesel ロックフェラー
大学名誉学長(ヒューマンフロンティア
サイエンスプログラム事務局長, 1981年
ノーベル医学・生理学賞受賞), 総長他と
懇談 | 学名誉教授(2005年ノーベル医学・生理
学賞受賞), 総長他と懇談 | |
| 5日 | 役員会 | 27日 | 企画委員会 |
| 6日 | 部局長会議, 研究科長部会 | 〃 | 総長ランチミーティング
(エネルギー科学研究科) |
| 9日 | イノベーションフォーラム@京大桂
〃 学生部委員会 | 28日 | 経営協議会 |
| 12日 | 役員会 | 〃 | 役員会 |
| 13日 | 研究推進戦略会議 | 〃 | 入学者選抜方法研究委員会 |
| 14日 | 財務委員会 | 7月3日 | 財務委員会 |
| 15日 | 創立記念日記念行事音楽会 | 〃 | 役員会 |
| 16日 | 名誉教授懇談会
〃 職員組合との交渉 | 〃 | Prof. Khunying Suchada Kiranandana
チュラロンコン大学学長, 総長他と懇談 |
| 18日 | 創立記念日 | 5日 | 企画委員会 |
| 19日 | 役員会
〃 永年勤続者表彰式 | 10日 | 役員会 |
| 20日 | 部局長会議
〃 教育研究評議会
〃 人権に関する研修会 | 11日 | 部局長会議 |
| 21日 | 総長, APRU 第10回学長会議に出席の
ためオーストラリアを訪問(25日まで)
〃 国際交流委員会 | 12日 | 大学入試センター試験実施委員会 |
| 22日 | 全学共通教育システム委員会 | 14日 | 学生部委員会 |
| 26日 | 役員会
〃 Dr. Robin Warren 西オーストラリア大 | 18日 | 役員会
〃 キャンパスミーティング
(アジア・アフリカ地域研究研究科) |
| | | 19日 | 国際交流委員会 |
| | | 21日 | 図書館協議会 |
| | | 24日 | 役員会 |
| | | 25日 | 教育研究評議会 |
| | | 28日 | 総長ランチミーティング(原子炉実験所) |
| | | 31日 | 役員会
〃 総長賞授賞式 |

お知らせ

平成18年秋季企画展

「湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念展 ―素粒子の世界を拓く―」

太平洋戦争敗戦後4年目の1949年, 日本人は物理学者の湯川秀樹博士がノーベル賞を受賞するというニュースに驚き, よろこびにわきました。水泳の世界選手権大会で日本人が優勝したというニュースとともに, 戦後の生活困窮と精神的な落胆で打ちひしがれていた国民に大きな希望と勇気を与えました。湯川博士が1935年に発表した中間子論が1947年に実験で検証されてノーベル賞受賞となったのです。

湯川博士とともに京都大学で量子力学という新しい物理学を勉強した朝永振一郎博士は戦中戦後の混乱期の中で場の量子論の難問に挑戦して1948年に「くりこみ理論」を発表しました。この業績によって朝永博士も1965年度のノーベル物理学賞を受賞しました。

両博士の生誕百年に当たり, 物理学の研究と日本の科学の発展につくされた業績をひろく皆さんに知って頂くためにこの展示会を企画しました。両博士の足跡と切り拓かれた世界をご覧ください。

1. 開催期間：10月4日(水)～平成19年1月28日(日)
2. 開館時間：9：30～16：30(入館は16：00まで)
3. 休館日：月曜日・火曜日(平日・祝日にかかわらず)
【但し12月28日(木)～1月4日(木)は閉館，2007年1月23日(火)は開館】
4. 開催場所：京都大学総合博物館2階企画展示室
5. 入館料：一般 400円，大・高校生 300円，中・小学生 200円
上記の料金で，常設展も同時にご覧いただくことができます。
6. 問い合わせ先：京都大学総合博物館
TEL：075-753-3272 FAX：075-753-3277

宇治キャンパス公開2006 —社会の持続的発展を目指した先端科学の融合—

総合展示

日 時：10月14日(土)9：30～16：30
10月15日(日)9：30～16：30

会 場：化学研究所共同研究棟

公開ラボ

日 時：10月14日(土)9：30～16：30
10月15日(日)9：30～16：30

会 場：宇治キャンパス内の各研究所・センター・研究科の施設および

防災研究所宇治川オープンラボラトリー

(防災研究所宇治川オープンラボラトリーは10月15日(日)10：00～16：00のみ公開します。

当日，宇治キャンパス-宇治川オープンラボラトリー間はシャトルバスをご利用ください。)

備 考：公開の日時は，プログラムおよびホームページにより確認願います。

公開講演会

日 時：10月14日(土)10：00～12：00

会 場：化学研究所共同研究棟 1階大セミナー室

演題と講師：「太るメカニズム，やせるメカニズム：生活習慣病との深いかわり」

農学研究科 教授 河田 照雄

「オフィスのエネルギー環境とオフィス作業の生産性」

エネルギー科学研究科 助教授 下田 宏

「地球を愛し，知を融合する —21世紀型課題へのアプローチ—」

生存基盤科学研究ユニット長 防災研究所 教授 井合 進

定 員：250名

参加費：無 料

生存圏研究所公開講演会

日 時：10月14日(土)13：10～16：40

会 場：生存圏研究所木質ホール 3階大ホール

演題と講師：「マツがつくる抗線虫物質ワールドにご招待

—どうしたらマツ林がもどってくるか考えてみませんか—」

生存圏研究所 講 師 黒田 宏之

「木造ラーメン構造の魅力」

生存圏研究所 教 授 小松 幸平

「超高層大気をさぐる」

生存圏研究所 助教授 山本 衛

「宇宙という生存圏と宇宙太陽発電」

生存圏研究所 助教授 白井 英之

定 員：150名

参加費：無料

化学研究所公開講演会

日 時：10月15日(日)10:00~12:00

会 場：化学研究所共同研究棟 1階大セミナー室

演題と講師：「未来に備える有機合成研究：新反応で地球の資源を大切に！」 化学研究所 教授 中村 正治
 「電子顕微鏡でどこまで見えるか？－これまでとこれから－」 化学研究所 教授 磯田 正二

定 員：250名

参加費：無料

樹木観察会(雨天中止)

日 時：10月15日(日)13:00~

集合場所：生存圏研究所材鑑調査室前

主 催 京都大学宇治キャンパス公開2006実行委員会

問い合わせ先 京都大学宇治地区事務部研究協力課

E-mail: kokai@uji.kyoto-u.ac.jp TEL: 0774-38-3352 FAX: 0774-38-3369

詳細はホームページをご覧ください

<http://www.uji.kyoto-u.ac.jp/open-campus/2006.html>

第4回 農学研究科シンポジウム (No Border Agric.) 多様性の中の統一を目指して

1. 日 時：10月26日(木) 15:30~17:40

2. 会 場：農学部総合館 W-100講義室(京都大学北部構内)

3. 演題と講師：バイオマスのモダン活用 —高機能材料への変換を中心に—

森林科学専攻 教授 西尾 嘉之

アグリ・フードビジネスとツーリズム・テロワー —産業クラスター研究の今日的課題—

生物資源経済学専攻 教授 小田 滋晃

暮らしに役立つ微生物の話 —ユニークな微生物機能の探索と産業への利用—

応用生命科学専攻 教授 清水 昌

4. 参加費：無料，来聴歓迎(事前申し込み不要)

5. 問い合わせ先：農学研究科等事務部教育・研究協力課研究協力掛

TEL: 075-753-6412 FAX: 075-753-6005

主 催：京都大学大学院農学研究科

共 催：京都大学農学部四明会

日本学術振興会国際戦略型先端研究拠点事業

HOPE プロジェクトワークショップ

「人間の進化の霊長類的起源」

「われわれはどこから来たのか」、「人間の本性とは何か」そうした根源的な問いに答えるためには、人間がどのように進化してきたのかを知ることが必要です。HOPEプロジェクトでは、それぞれの国の中核的研究拠点とそれに協力する共同研究者が、ヒトを含めた霊長類を対象に、その心と体と社会、さらにその基盤にあるゲ

ノムについて研究しています。当ワークショップでは、世界の第一線で活躍する研究者による最先端の研究成果、および京都大学霊長類研究所における研究実績について紹介します。

1. 日 時：11月6日(月)10:00～17:40
2. 会 場：第二豊田ビル西館8階 第二豊田ホール(名古屋駅より徒歩3分)
3. 定 員：150名
4. 参 加 費：無料(申し込み不要)
5. 問い合わせ先：京都大学霊長類研究所
遠藤 秀紀 TEL:0568-63-0520 E-mail:endo@pri.kyoto-u.ac.jp

京都大学のキャンパスメンバーズ制度入会について

～本学学生証等を提示すると、京都国立博物館・奈良国立博物館の平常展が無料です～

キャンパスメンバーズ制度とは、国立博物館と大学等との連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を学生に提供することを目的にした会員制度です。京都大学は本制度に平成18年8月22日に入会しました。

学生の皆様は、本制度を利用していただき、両博物館を見学してください。

種 別	平常展(特集陳列含む)	特別展	施設の利用
学部学生, 大学院学生, 専門職大学院学生	無料…学生証・身分証明書・研修員証が必要 (何度でも観覧可能)	団体(学生割引)料金…学生証・身分証明書・研修員証が必要	割引料金で使用…講堂・茶室・会議室等
聴講生, 特別聴講学生, 科目等履修生, 研究生, 特別研究学生			
研修員			
引率教職員	無料…引率教職員は「職員証の提示及び引率の旨を伝える」こと	団体(一般割引)料金…引率教職員は「職員証の提示及び引率の旨を伝える」こと また、学生20名につき引率教職員1名は無料* ¹	/
備考	平常展…定期的に展示替えが行われる。 特集陳列…時節に応じたものが展示される。	共催展…料金は別途定められる。	

※1…学生20名に引率教職員2名の場合、内1名は無料、もう1名は団体(一般割引)料金です。

■京都国立博物館

住所：京都市東山区茶屋町527

電話：075-525-2473

<http://www.kyohaku.go.jp/>

■奈良国立博物館

住所：奈良市登大路町50

電話：0742-22-7771

<http://www.narahaku.go.jp/>

担当部署：学生部学生課学生企画グループ(内線 2504・2588)

公開講座

京都大学21世紀COE「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」

第4回 市民講座 「宇宙と物質の神秘に迫る～物理科学最前線～」

宇宙は非常に高温・高圧の熱平衡状態から始まり、豊かな階層構造をもつ現在の姿に変化してきました。夜の星空を眺めて、宇宙がこのように進化していることを実感するのは難しいでしょう。このような自然界の時間進化を記述することは物理学の対象です。今回の講演会では、世界の最先端で活躍中の京都大学の素粒子物理・宇宙物理・生物化学物理の先生方にそれぞれ、物質の起源、活動的な天体現象、非平衡系が作り出す構造について、わかりやすく解説していただきます。ぜひご参加ください。

1. 日 時：11月11日(土) 13:00～17:00

2. 会 場：時計台記念館百周年記念ホール

3. 演題と講師：特集テーマ「非平衡の世界」

「非平衡が創り出す時空間パターン」

理学部物理学第一教室 教授 吉川 研一

「爆発だらけの宇宙」

理学部附属天文台 教授 柴田 一成

「宇宙の反物質と時間の矢」

理学部物理学第二教室 教授 笹尾 登

講演終了後、午後5時半～6時半に、講師の方々と歓談できる簡単な茶話会(会費500円)を開く予定です。

4. 受 講 料：無料

5. 対 象：中高生以上

6. 定 員：500名(申込多数の場合は、申込ハガキ又は電子メール先着順)

7. 申 込 方 法：往復ハガキまたは電子メールに、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、茶話会への出席希望の有無、を記入の上、下記にお送りください。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町京大理学部物理学第二教室内

京都大学21世紀COE事務局 市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る」係

TEL: 075-753-3758 E-mail: shimin@cr.scphys.kyoto-u.ac.jp

8. 申 込 締 切：10月31日(火)必着 定員オーバーの節はご了承ください。

主 催：京都大学21世紀COE「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」

<http://physics.coe21.kyoto-u.ac.jp/>

後 援：京都新聞社、物理教育学会、天文教育普及研究会、京都市教育委員会、京都府教育委員会

編集後記

我が家で蟋蟀 [コオロギ] が鳴いています。

「寸言」, 「随想」, 「洛書」, は読み物としてお楽しみいただき、お知らせや日誌は記録としていただきたいと編集スタッフの独言。ホームページのさらなる活用をとの声も聞こえてきます。京大広報の使命は、大学の出来事を教職員にお知らせするものですが、今号から新たに理事・監事の活動を掲載いたします。

また、ホームページではメルマガの配信も始まりました。入試のこと、同窓会のことなどをお届けしますのでお早めに登録ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/m_magazine/mm_index.htm

